

昭和五十二年二月一日第二種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)26117079
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額400円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■ 巻頭言 ■

総評指導部のペテンを許すな 2

党中央は現場のエネルギーを結集せよ 4

— 京都府知事選の結果と教訓 —

座談会 春闘をたたかって(三) 8

組合をつくり直す努力はどうだったのか 8

— 八二春闘の総括視点と今後の課題 —

◇ 新刊のお知らせ ◇

「国鉄『再建』をめぐる基本問題」 18

(行政改革と労働運動) 小林 晃編著

好評発売中

岩井章・灰原茂雄編著

八〇年代労働運動と反撃への道

定価一五〇〇円(千二百五〇円) B6判・三六〇頁

旬刊 社会通信

NO. 161

一九八二年六月一日

一九八二年六月一日

(毎月一日・二日・三日三回発行)

■ 巻頭言 ■

総評指導部のペテンを許すな

ペテン師、ウソつき、いやな言葉である。だが、この言葉を総評指導部に献上しなければならぬとは。私はこの原稿を肚ワタが煮えくりかえる思いで書いている。

労働運動の原則は、指導部がウソをつかないことである。真実を語り、実行することである。第二組合、同盟・J〇が意識の弱い組合員をダマス、これはわかる。それに総評指導部が加わった。労働者は誰を信用すればよいのか。

一

総評は昨年二月七日、拡大評議員会で準備会参加を決めた。これには二つの留保条件があった。第一、準備会は「自由な討議の場」「門戸開放の場」であること、第二、宇佐美同盟会長の「発言撤回」、がそれであった。宇佐美同盟会長は、発言を撤回することを再三再四拒否した。ところが、総評指導部は、「宇佐美発言が撤回された」旨、声明。昨年一月一四日、五単産を準備会に参加させた。

ところがどうだ。八二年一月の同盟大会では、宇佐美会長は「撤回していない」旨を同盟大会で表明した。宇佐美は総評内の矛盾をさらに激化させる挙に出たのである。そして、総評指導部のウソを暴露したのだ。総評指導部はこの発言を黙認した。そればかりではない。さらに同盟にすり寄った。第二陣を二月末までに準備会に参加させたいと。同盟は威丈高に構え、総評は懇願する。労戦の主導権が誰にあるかは明らかだ。

二

この結果、総評民間単産は大混乱におちいった。強行採決で準備会参加を決めたところ、採決が否定されたところ、執行部の意をくんでなんとかおまかせを、というところ、問題にならんとしたところ、現場の勢いに負けたところ、総評はおれたちがいたただくとしたところ、と「分裂」した。同盟・J〇の連中は「してやったり」とほくそえんだことであろう。総評は実質的に「分裂」「解体」の道にふみだした。楨枝・富塚指導部がその最大の功勞者だと。

その「功勞者」たちは三月六日、私鉄、全金をふくむ七単産を準備会に参加させようとした。だが、同盟はそれを拒否した。拒否の姿勢は延々一カ月半におよんだ。同盟・J〇が拒否した理由は二つあった。一つは、総評七単産が「基本構想を認めないのほけしからん」というものであり、二つは、「分裂」組合は同盟に吸収併せさせていたたく、それでは正しいかというものである。そして、五月八日、総評は同盟に拝跪した。その結果、七単産の準備会参加がようやく許可されたのだ。

四

一ヶ月半余、七単産が「棚ざらし」「生き恥」をさらした原因は、その加盟申請にあたって、「団体間協議の経過と結論を尊重し、総評拡大評議員会の決定に基づき（門戸開放、自由な討議など）統一準備会に参加します」としたことだ。同盟はこれに強く反発。

「①『統一推進会の基本構想』にたいする七単産の態度があいまいだ、②競合組合（分裂組合）の調整がつかない」と、同盟が「基本構想」の承認を露骨にせまったのだ。

問題がどう解決されたのか。同盟が総評に譲歩したのではなく、総評が同盟に全面的に屈服し、その結果、「参加」が認められたのだ。つまり、総評は昨年二月の拡大評議員会での二つの前提条件、さらに八二年三月三日の「統一準備会への参加について」の承認を放り投げ、同盟に許可を「お願い」したのだ。

これは「第四回統一準備会経過報告」「第五回統一準備会議案」に明らかだ。「第五回統一準備会議案」では、「（七単産の加盟にあたっては）第四回統一準備会（一次・四次）経過報告を確認し、幹事会提案どおり加盟を承認する」としていることだ。「経過報告を確認」というのは、本誌第一五八号資料④に掲載した準備会幹事会の確認事項、「新規参加申し込み組織のとり扱い」をさし、総評がこれを認めたら承認したというものだ。それは二項から成り、第一項は「統一準備会に加盟を申請する単産については、統一準備会の今日までの事実経過を尊重する」というもので、「基本構想」の承認を露骨にせまったものであったし、第二項は「競合単産のとり扱いについては、その存在が統一の阻害条件になっていることを考慮し、統一のための条件づくりに努力するとともに、既加盟単産（同盟系のこと）との調整をおこなう」というもので、総評系単産を同盟系単産に吸収、合併するというものである。この二つともに総評が飲んだ。だから、同盟は「それなら」と七単産の、参加を承認したのだ！

つまり、第一項については「第四回統一準備会経過報告」で、「確認事項の第一項（事実経過の尊重）については四月八日の会合において、七単産はこれに同意した」と述べられているばかりか、同盟が総評の前提条件を承認したのではないことを強く印象づけるために、「なおお申込表記事項（総評第三回拡大評議員会決定）は、総評の内部問題であって部外の統一準備会宛文書としては不適切として、削除することにした」とさえ述べられている。総評の主張は何一つとおってはいない！さらに、前に記したような意味をもつ第二項についても「調整は概ね完了」とされている。

総評は全面的に同盟に屈服し、みずからの解体を認めたのである。そのうえに準備会は、本誌第一五八号資料②に掲載した「運動方針、運営要綱素案」（フリー討議用レジメ。これには「基本構想にもとづく」ことが明記されている）にもつき五月一九日の第六回準備会以降、討論を進め、「おそくとも六月中にも完了」したいとしている。

五

こうまでしてなぜ総評指導部が同盟に頭を下げるのか。総評指導部の頭が完全に「洗脳」されているからだ。だから、同盟は五月一四日付の同盟新聞「主張」で、「四十七単産が運動路線上の基本的な考え方については、今や大きなへだたりのないところにきていることを誠心誠意話しあい、虚心坦懐に論じあい、そのことをお互いに確認しあうことである」と六項目を示し、また「競合問題」についても、「（この根本は）路線上の対立」だが、「今日では……運動路線上の基本的考え方については、大きなへだたりがないところにきている」から、「調整の機運は、この土壌の変化につれて、次第に熟してくるにちがいない」とまで述べるのだ。

こうした動きにたいして、全金、全国一般、紙労連の単組、有志から「公開質問状」が提出され、総評三顧問も昨年八月につづき行動を起こすと伝えられる。いよいよ、現総評指導部に幻想をもつことをやめなければならぬであろう。

党中央は現場のエネルギーを結集せよ

—— 京都府知事選の結果と教訓 ——

京都府知事選挙の意義

京都府知事選に激励と支援を寄せて下さった全国の同志のみなさんに、心からの感謝をこめて、この報告を送る。

今回の選挙の特徴は、社会党京都府本部が明確な方針を出さず、選挙を放棄したなかで、黨員の有志と総評京都地評が「府民本位の新しい民主府政をつくる会」推せん川口是（ただし）候補を支持して、保守反動勢力とたたかっていたことにあるといえる。

京都府知事選挙の歴史

問題点を明らかにする意味で、まず京都府知事選挙の歴史をふりかえる。

知事公選、初の一九四七年選挙は、それまで官選知事として在任した木对悳に、革新側が統一した候補を立てることができず、木村の勝利に終わった。

ところが任期なかばにして木村が辞任するにおよび、この年の二月京都市長選で高山義三を革新統一候補におし勝利した革新側は、この勢いにのって五〇年選挙にとりくむこととなる。

五〇年選挙は、社会党、共産党、労働組合および市民団体を網羅した「全京都民主戦線統一会議」（民統）が選挙母体となって、ニナ川虎三を推せんし、副知事であった井上清一を破って革新の旗を打ち立てた。

以来、七期・選挙ごとに社会党、共産党、労働団体そして市民団体の間で「統一」への話し合いと、努力が重ねられ、それにもとづく組織づくりが、その都度なされてきた。

しかし、保守反動の側からは、革新陣営分断の攻撃、工作が不断にかけられる。五八年選挙では自民党が、対立候補を立てずニナ川を推せんすることとなる。革新陣営側は、この推せんをめぐる議論が沸騰し「あくまで推せんを拒否すべきだ」として共産党は独自候補を立てニナ川に対決する。

六二年選挙で、自民党は一転して独自候補をたて、社会、共産、民社三党連合にいどむが大敗する。六六年選挙は民社党の持ちゴマともいえる候補者に自民党は相乗りする。ここではじめて自民党が、革新の一角にくい込み、自民、民社連合体制が出来上がる。

つづく七〇年選挙では、自民党は前回の民社党に加えて、公明党をも抱き込み「京都を明るくする会」の結成に成功する。

そして、七四年選挙では、社会党京都府本部委員長、参議院議員の大橋和孝が、党内江田派の激励のもとに、ニナ川批判を前面におし出し、自民、民社、公明各党の公然、非公然的の支持を受けて立候補することになる。京都同盟はもちろん、総評京都地評傘下労組のなかにも大橋を激励、支持する単産、単組が出る。この時、当時の成田委員長は、慎重の上にも慎重を期しながら選挙告示当日、大橋を除名し、革新の途を明らかにしてニナ川支持を決然と表明した。しかし、社会党京都府本部は、事実上ニナ川派と大橋派に二分する。

ニナ川が引退を表明した七八年選挙は革新にとって、さらに困難な年となる。すなわち、社会党京都府本部副委員長、代議士の山田芳治が、東京で公明党、民社党の

推せんと、自民党の心情支持をとりつけた、として、いわゆる「社公民路線」を京都にもち込んできた。

京都府本部は前回七四年選挙で分裂したにがい経験から、再び党二分のワダチを踏むことは避けたい、という気運が強く、十分な政策論議のないまま、社公民路線の持ち込みをゆるし、外見的には、一応社会党としての結束を計ることができた。

しかし、この山田の持ち込んだ社公民路線プラス自民党心情支持イコール「反共路線」は、選挙公示をまたずに破綻する。自民党は参議院議員林田ゆきをを擁立する。そして選挙に入るや、まず民社党が山田から脱落し、公明党の動きもあやしくなる。

選挙戦は共産党およびニナ川支持者たちの推せんを受けた杉村敏正を加えた三人のあいだではげしくたたかわれ、林田五〇万二一七五票、杉村四三万三九三一票、山田二〇万四四一九票で、七期二八年のニナ川体制は保守反動に城を明け渡すこととなった。

以上、京都知事選挙の経過を概観したのは京都が東京、大阪をはじめとする革新首長誕生のさきがけとなった栄光の歴史を持つとともに六二年、とくに七〇年以降は保守反動の分断攻撃のまえにニセ革新が、次々と馬脚をあらわし、国民勤労大衆の期待を裏切っていく過程が、まさに標本的にあらわれているからである。

もちろん、この背景には、保守回帰とか、右傾化とかいう言葉に代表される全国的な潮流があるの言うまでもない。

八二年選挙と社会党の対応

林田再選をめざす今回の選挙に臨む保守反動側の作戦は、いわゆる「中道政党」をより確実に味方に抱き込み、共産党だけを孤立させるといふ戦略のもとになされた。この事情を朝日ジャーナル（四月二三日号）で大内宏は、次のように報告している。「まず予算陳情に上京した林田氏自身が田中派の実力者竹下登氏と会い、社会、公明、民社三党への根回しを依頼した。ねらいはひろく中道各党を引きつけることで社会党を牽制し、社共の分断を図ることにあった」

この根回しは功を奏し、前回、山田を一応推せんした公明、民社両党は、いちはやく林田支持を表明し、より確実な自民党の友軍になる。

一方、第三九回府本部大会（八〇年一月三日）で「八〇年代は真の分権、自治による新たな民主主義の構築にあります。革新府政をとりもどすことは、党に課せられた当面の至上命令です」と知事選挙を位置づけた社会党京都府本部は、選挙対策本部を構成をし「統一候補の追求」に当ったものの、社会党が推せんしようとした複数の人々から断われ、時間的にも方針の決断が迫られ、また、黨員はもちろん、支持者からも社会党の去就が注目される段階にいたってなお、執行委員会においてすら積極的な討論を組織することなく、二度にわたって大会で確認した「反自民・反林田」の基本方針を事実上形骸化する「自主投票」を、選挙公示直前の三月一三日の執行委員会で決めた。

事実、一時は統一候補の追求の努力が払われた時期もあったが、しかし、その努力の足をひっぱったのは①府会議員団（六人、うち一人は非黨員）は、林田府政のもとで、副知事選任案件に反対した以外、すべて理事者の提出議案に賛成し、その政治姿勢は事実上与党となっている、②府下でおこなわれた主な首長選挙の多くを自民党、中道政党と組んだ選挙をしている、③労働者黨員のなかには、労組内で党の政治方針を宣伝し、影響力をひろめ、党への支持をうち立てる努力をせず、逆に労組幹部の地位を利用して労組を党の上

に置いて、力で党の方針を左右しようとする不法な勢力がある、ことをあげることができ

る。知事選の歴史、今回の経過、そして全国的な動きと今日の党勢を見たとき、保革の対決となった以上「反自民、反林田」といいながら、あれこれの理由をあげて「自主投票」というのでは、事実上、知事選を放棄し、社会党支持者を失望させるだけでなく、京都地方における社会党の存在価値を問われると考え、社会党員の有志と総評京都地評内の社会党員および支持者による「よびかけ」（本誌第一五六号）がおこなわれたのである。

だが、社会党京都府本部の最終態度の表明が公示の四日前であったのには、林田側は現職の優利さを生かし、数カ月まえから着々と体制づくりをおこない、その組織には、これまで社会党支持で活動したことのある人たち、とくに福祉、商工、建設など業界団体の役員である者をネライ打ちして珍重し、体制にとり込んでいく。

このハンデは、とくに、郡部において、われわれの側に、最後まで重くのしかかってきた。

選挙の結果について

選挙の結果は、林田六万五万六四三〇票（六三％）、川口三万八万八六六四票（三七％）であった。

商業紙は、この結果を「二六万票の大差の勝利」といい、山田票二〇万票は林田に流れたうえ、前回、杉村が獲得した四三万票をも川口は守り切れなかったという論調で、紙面を飾った。

だが、前回の知事選の結果と今回のそれとを単純に比較して評価を下すことは、次の点から不十分さがあるといえる。

①前回は、自民党対社会・公明・民社党対共産党の三極であったのが、今回は、自、公、民、社民、新自共対共産党の二極対決となっている、②林田の四年間の実績と、権力による介入、支配が強くおこなわれた反面、③ニナ川は死亡し、いわゆるニナ川個人支持者もよりどころを失なっている、④前回、山田支持の公明、民社票は林田支持に変わっている、⑤山田の政治生命は四年前に比べて格段に低下している。

したがって、林田府政下でたかわれた八〇年総選挙（衆・参同時選挙）結果を基礎に考察することの方が、より適していると思われる。

総選挙結果を今回の選挙にあてはめれば、林田が基盤とする自民党、中道各党の合計票は七七万三四五二票であり、川口が基盤とする共産党の得票は二五万五七〇三票であり、今回の選挙の発表は、この七七万対二五万票からだともみることができる。ちなみに、このときの社会党の得票は一三万二六七二票である。

したがって林田は、この基礎票をいかに守り、川口は二五万票に、いくらを積み上げるかにあったといえる。

結果は、林田は基礎票の八四・九％を守ったのに反し、川口は共産党得票にたいし一五二％。総選挙での共産党に社会党票の合計得票に見合う三八万八千を得票した。

しかし、投票率は総選挙が六七・八九％であったのにたいし、今回の知事選挙は五九・九九％という低率であったから、それを考慮に入れる必要がある。そこで、かりの計算として、今回知事選が総選挙と同じ投票率であったとして試算したところ、林田は「得るべき投票」に比べて四万三千票少なく、川口は四万三千票の健闘であった、ということになる。

この結果からみて、社会党京都府本部があれこれの理由をあげてたたかいを放棄し、各級議員および予定候補者、党役員幹部など、党の顔というべき者の大部分が傍観し、しかもさきに述べたように、従来の社会党支持者のうち、地域で影響をもつ、主な人たちが林田体制に組み込まれるという悪い条件のもとで社会党支持票の多くは、なお川口に投ぜられたとみることが出来る。

しかし、社会党京都府本部が、選挙を放棄したなかで正しい判断を下した多くの党支持者が八三年決戦にあたって、党が何の自己批判もなく党公認候補を押しつけても、ここで無言の手きびしい反撃を食うのではないかと私はおそれる。

社会党中央は下部のエネルギーを結集せよ

この報告で記述したとおり、ニナ川が「民統候補」としてたたかった五〇年選挙から今日まで、保守反動側の一貫した政策は「反共」であった。たしかに、選挙のたびに保守は保守なりの教育、道路、福祉、中小企業問題の政策を対置はしてきたが、これはたんに、「反共」をきわだたせるための飾りつけにすぎない。

これは、ひとり京都地方に見られる特異な現象ではなく、世界的にはレーガンが狂気の叫んでいる、戦争政策の根底をなすものであり、わが国においては、自民党が国政全般にたいして、その基礎にすえている政策である。

そして今日「反共」の大合唱に民社、公明両党が、いよいよ声高く唱和し、党内の一部や、身近かな労組幹部からさえ、これに加わろうとする危険が、ないとはいきれないところまできている。

「反共」は、ややもすれば「日本共産党」にたいする反対、排除、否定というように理解されがちであるが、保守反動側は、この理解の甘さにつけ込んで「反共」の世論を定着化し、彼らが究極の目的とするマルクス主義、社会主義を否定しようとすることを、見抜くことが、今ほど大切なときはない。

社会党が、党の再生、再建のためとして、つねにいう「党の主体性」と「足、腰の強化」が、ひとつの座標軸である、とすれば、もうひとつの座標軸は「反共」攻撃に立ち向かう、社会主義者としての自覚と自信を身につけることにおくべきである。

京都知事選は、革新を打ち立てる先駆的役割を果たした意味からも、また社公民路線を全国にさきがけて持ち込んだことから注目されてきた。

そして今回も、中央本部は、京都の動きに注目しながら、社・共の統一に必ずしも積極的でなかったとも聞きおよぶ。

だが、冒頭に特徴として述べた、党内有志と総評京都地評の社会党支持者のよびかけと、その選挙闘争は、全国的にみて社会党県本部を総評県本部が批判をもちながらも、同じ態度をとっている現状にあって、今回のたたかいは全国的にもはじめてのものであったと思う。

しかし、今後は、このような特異な形体のたたかひにならぬよう、中央本部も下部のたたかうエネルギーを結集し組織する姿勢を堅持してほしいと強く望むものである。

(京都・M)

座談会 春闘をたたかって(三)

組合をつくり直す努力はどうだったのか

八二春闘の総括視点と今後の課題

順序が後先になったが、今号では前号につづき、春闘総括の視点、そして社
会党の動向についての討論を紹介したい。

これはお願いだが、職場の仲間のたたかいとその総括を編集部にお送りいた
だきたいと思う。「社会通信」でくり返し訴えているように、今日の労働運動
の課題は、職場の「シラケ」を吹きとばし、労働組合への「参加」をどうかち
とるかにある。全国の仲間はこのために悩み、創意工夫をこらしたたかっ
ている。だが、この努力が集中されていないのが、今日の労働運動の現情だからだ。

司会 国鉄問題は春闘の再構築と同様、日本労働運動の帰趨にかかわる大問題です。論議
をここからはじめていただきましたが、ついで春闘総括に論議を移していただきたい。私
の報告は私の問題意識をそのまましております(第一五九号、報告①参照)ので、率直
にご意見を出していただきたい。

根強い公労協幹部の社会党批判

K 情勢との関連でまず申し上げたい。公労協の年度末手当の削減問題のとき、いちばん
強く感じましたのは、公労協出身議員の社会党執行部へのものすごい反発です。目に見え
てましたね(笑)。年度末手当でのたたかいは国会段階のなかでは、社会党をつうじて自
民党とワタリ合っていくことが、切羽詰まった段階までしかできませんでした。公労協の
幹部諸君は「社会党がだらしなからだ」とよくいうのですが、私の見るところではそう
じゃないですね。Eさんがおっしゃったように「会う」「会わない」の論議(本誌第一六
〇号、報告⑥参照)もありましたが、現社会党執行部を中心にした運動を展開しようとの
姿勢が、公労協幹部になかったというのが正確なように思います。もちろん国対に足らん
面は否定できません。経験の問題でしょうからね。こういうことから、党にたいする批
判、反発が労働組合の幹部層に相当はげしく、とくに公労協の場合あったという感じがす。

「民賃準拠」の本質は賃金水準だ

次に春闘についてです。レジメに「内需拡大で四団体合意」とありますね。このとおり
だとは思いますが、三月中旬の春闘共闘会議の文書では、たしか「内需拡大は補完的な
目標であり、賃金闘争が本来の目的だ」「そこを間違えてはならん」と書かれているん
です。おもしろいと思ったのですが、春闘共闘も「スジ」とおそろ、主体性をもとうとい
う感じが、そこに出てたとみておいていいと思う。

「整合性」論については、日経連の攻撃としてはあります。しかし、労働組合の側とし
ては主張としてできるものではありません。やってみてもどうしようもない話ですから。

総評の考え方をまとめていけば（「整合性」論的な考え方が）、春闘白書などにもでていないわけじゃありませんが、かならずしもきめつける必要もないと思います。むしろいいちゃうだけですから（笑）。

私、賃金問題を担当しておりますが、「民賃準拠」に対抗する手段を公労協、公務員はもたんですね。「民賃準拠」にかなしていえば、世上では上げ幅の準拠だけが計数的にいわれているわけです。そこで実際に水準自身の準拠になっていないというのが問題なんです。実際の賃金水準になりますと、公企体の場合、民間の千人規模と比べると一〇〜一三％、低い低いんです。百人以上の規模と比べても勤続年数問題をいれますと、七割くらい低い。どういふことかといいますと、同じ三五歳くらいの人で公企体の場合ですと、勤続一七年もつています。民間の勤続一七年もつた人と公企体のそれとを比べた場合、鉄鋼の賃金をみたらわかりますね。二二万くらいです。公企体の場合は一七万五、六千円しかないんです。諸手当を含めても一八万そこそこでしょう。したがって、三万くらい低い。こういうところがぜんぜん論議にならず隠されているわけです。

そこで「民賃準拠」という論理をたてるならば、水準というものについてたてなきゃおかしいよ、と去年から公労委でやりとりしているんです。そういつたなかで、公企体の賃金闘争論のなかで大事にしていかなければならんことは、「民賃準拠けしからん」論議じゃなくて、もし民賃準拠をやるんだつたら、今いったようなことをしっかりとっておかなければ「全面敗北してしまうよ」とのたて方をしておくことが必要じゃないかという感じがしています。ところが「偉い人」の頭のなかにはなかなか入らなくてね（笑）。

もう一つ公企体の賃金闘争論についていいますと、大衆闘争論を別にしても、いちばんきつかったのは年度末で二割くらい削減されちゃったでしょう。国鉄の場合。この理由は唯一、赤字論ですよ。今年の賃金回答のなかで特徴的なことはかろうじて格差回答をおしとどめたことがあると思います。新聞にもチラッと出てましたが、組合のなかには低額回答に引つ張り込まれたという意識をもつところがあります。格差回答をなんとか阻止しえたことをどうみるか、あるいは電通は「春闘見直し」論をもちながらだけれど、今年は公労協統一闘争のなかに入らざるをえなかつたということ、もちろん全体の行革攻撃のなかで電通の意志がどこにあるかはわかりませんが、こういった点も少しはみておく必要があるような気がします。

電通の方もおみえですから、この点ぜひあとでうかがえればと思います。たとえば今年の場合「緊急避難」という表現で公労協に復帰してきた意味ですね。

きびしい情勢だが大衆闘争には展望

春闘総体を考える場合、第一に全体的に攻撃がはげしいのと、労働組合の力がたたかう方向にむかっている状況における春闘だったということを前提にして総括をしていかなければ、元も子もない総括になってしまう（笑）という感じがしております。

全林野の場合、賃金闘争、前段の広島集会、反合問題、年度末問題もありますけれど、一連のたたかいをやっていますと、とくに年度末では現場の営林署長から職場の交渉で追いつめられてしょうがないものだから、直接林野庁へ上申交渉ですね。全面展開になりま

した。去年よりは進んだとみていますが、今年も賃金要求を全部の分会で出させています。本部で出したのと同じものを各営林署長あてに出させ、そこで大衆団交やつてるわけです。中央交渉事項ですからやりとりしないですけれど、当局の姿勢を明らかにさせたことがいくつか出ています。

そういう意味では全体的には力関係を代えるところまでいけなかったにしても、ケンカの仕組みをキチンとおさえやっていけば大衆闘争を組織できるような情勢がある春闘だったと思っています。そういう意味では、司会の方は「全面敗北よ」とおっしゃったが(笑)、全体の流れとしてそうみてもいいかもしれませんけれど、実際にま労働組合の幹部自身もたいへん苦慮していますよね。こういう情勢ですから。労働組合とその幹部の存在意義が問われるようになっていきますからね。ですから、中味のめぐり方みたいな総括がいま必要なのではと考えています。

路線上の誤りを明確に

G Kさんが「中味のめぐり方みたいな総括が必要」とおっしゃったことに賛成です。今日の労働運動をめぐる状況下にあつては、指導性をめぐる問題に鋭い批判をくわえることはもちろんですが、それ以上に私たちが大衆闘争の発展のためにどういう創意、工夫をなし今春闘をたたかたかが問われなければならないと考えるからです。こういう観点から、少し申し上げてみたいと思います。

まず全体的な春闘の見方ですが、私も以前役員をしておりましたから、幹部諸氏がいいようなことは推測できる(笑)のです。つまり、「格差をつけさせなかつた」「民間準拠でマアマアの所にいった」「きびしいなかで六・九%出たじゃないか(笑)、したがって総合点をつければ「八〇点」というだろうし、全電通についていえば、「全電通が復帰したからこうなつたんだ」と吹くでしょう(笑)。そういういい方で、彼らの路線上の誤り、指導の責任をごまかしてやることにたいして、われわれはキチンと理論展開する必要があるように思うのです。

したがって、「賃上げして内需拡大をすれば景気浮揚になる」といういい方、「整合性論」とは言葉ではいわないまでも、生活実態で討論することを否定する「四団体合意」、ここ何が決められたかという経済指標です。はじめから経済指標で要求を決める所に間違いがあります。これが「整合性」論だと思ふ。だから方針にこの文字が何回あらわれているかではなく、出発点に賃金闘争の思想的屈服があることに最大の問題があると思ふ。その結果、まったく組合員の声を吸い上げる努力が忘れられることになります。アンケート調査の使い方がまさにそうでしょう。今年の春闘では十何万かのアンケートがとられました。三万〜三万五千が一番多かったのですが、一ケタ下げ二万以上とされました。これは完全なごまかしで許せないことと思ふ。組合民主主義にかかわる問題です。つまり、労働者のたたかうエネルギーに水をかける結果になつているからです。

仲裁の完全実施は疑問

格差の問題については、敵のねらいが公労協をまとめて「ストなし」にもつていくこと

であつたと軽く評価することが必要だと思ふ。調停段階ではたしかにきつかった。ところが実施段階で格差をつけない保障はなにとしてありません。きのう(四月二〇日)の閣議ではさつそくいちやもんがつけられています。実施段階で格差の攻撃につながると思ふ。だから完全実施の問題になるのはおかしいんですね。労働組合にいくじがないから社会党にたより、国会でなんとかしてくれというのわかります。しかし、組合幹部がそんなことをいうのははずかしいことだと思わにやいかんのですよね(笑)。賃金闘争の結果はなしですから。スト権を剝奪されたとき、代償措置としてつくられたのが仲裁裁定です。仲裁裁定を実施しないといえ、今ただちにスト権を回復せよとならなければいけません。論理的にいえばね。スト権禁止した代償措置がなくなつてしまつたわけですから。したがつて、統一闘争でストライキをやろうと。労働組合が自力でたたかう構えなくして社会党になんとかというのほだらないよ(笑)。もちろん社会党はなにもせんていいというわけじゃないですよ。社会党のほうからいうべきことがあるとすれば「労働組合さんもつとしっかりしろ。これはあなたたちの団結権の問題じゃないですか」だと思います。ですから、今、労働組合が問われているのは組合運動のイロハの問題だと思ふ。それは思想的に屈服しているところから生まれており、現場にはたたかう力があるにもかかわらず、そのエネルギーが有効に組織されることなく、力の出せない春闘に終わつていことだろうと思ふ。そういう悪い状態をつくつていのはやはり右派幹部だ(笑)。だから、春闘の経過と結末については、「どう考えても納得できない」ということを組合員の声として組織していくことだと思ふ。へたなごまかしにまるめこまれないことです。怒りを反撃の力へ結集することです。

国労のように力のある組合では下からワンワンやつてますよね。「ヤミ」「カラ」攻撃でも職場でニュースをだし、「なぜたたかわん」と突き上げてますわね。全電通ではこんなことやればただちに発行禁止です(笑)。だから、多くの組合では組合員の声を結集して総括運動を盛り上げていけばいい収約が勝ちとれると思ふんです。たとえ、総評のただ一つの組合でも原則をおしとおした機関決定をかちとつていく、そして間違つた路線をなおしていく、そう考えています。

公労協、私鉄の動向に大きく左右

J 公務員共闘についていいますと、今年の春闘では昨年の人勧が値切られたということでおいてても政労交渉をつくりだしながら、完全実施を約束させていくことを最大の目標としました。しかし、力がないものですから、(春闘の)とりくみ段階から国公関係ではストライキをやらない、むしろ春闘よりも人勧期、確定期に力を入れていくという議論がありました。日教組は兵糧攻めで二九分一発しかストライキができない。地公三単産がストライキをやつても社会的影響力は少ない。それで都市交の場合、私鉄との連動、交運共闘との連動以外は足をとめるわけにはいかないと、結果的には一三日の一時間に終わりました。

政府交渉の方も相当にきついでらうと予想してやつていたんですが、一番姿勢のいいの

は人事院です。総理府、労働省の方は人勤を尊重するのは「たて前上当然だ」と変わった。昨年までは「尊重します」といっていたのですが。結果的に公務員共闘独自で戦術行使しながら政労交渉をセットしていく力がなかったために、私鉄あるいは公労協を理由にして公務員共闘もいっしょに後退という状況です。

今、地方で共通しておきていますことは、労資で賃金決定しても議会がそれを否定し、一方的に予算修正し、支払いができない条件をつくりだしていることで、これにどう反撃するかが課題になっています。一―二例を申し上げますと、北海道の帯広で労資で決めたことが議会で否決され、労働委員会に提訴して、労働委員会は労資で決めたことは当然支払わなければならないということで、反対を決めた議員を喚問しながら裁判闘争をやっているのですが、これは困難な状況にあります。労働委員会がきちつと「労使で決めたものは支払うのが当然」と判断を下して、市長が再び提案したが、また否決とされたという事例があるからです。今、高松で起きているのは「議会が決めたことについては議会を尊重しなければいかんから実施できない」というものです。裁判にかけてはみたものの、議会にとおらなければ支払いが不可能なわけですから、打つ手がないという状況になっています。

だんこ大衆闘争を構築する

M 今年の春闘を一言でいえば司会の報告にもありましたが、「大衆の出番のない」春闘につきまします。われわれとして、「出番」をどうつくっていくかが中心かなと思っています。つくるとあとでまとめるのがたいへんだからと（大衆運動を）つくらない人がいるようですけれど（笑）、われわれはだんこつくっていかねばならんと思っています。

次に今後の私鉄の関係ですが、TTS加入問題があります。全林野さんの方からぜひうかがいたいと思っています。

労戦「統一」について、七単産が今の報告のようにガタガタしていることはいいことです。それから、これからどうするかについて考えていきたい。先ほどGさんがいられていました。月刊社会党三月号で、去年おきた日産・川口の問題がとり上げられましたね。春闘要求のとき、「低すぎる」と発言したら、相当長期間にわたってひどいリンチを受けたというものです。彼らは労働者に職場でものをいわさないために、見せしめみたいなのをやっているわけですから、労戦「統一」準備会春闘というのはああいうものだといいことを少し宣伝していきたいと思っています。同じ埼玉ですから。

全体の私鉄の関係につきましては、中小で希望退職、指名解雇、バス・鉄道の分離等いような合理化がだされています。

私鉄中小はストライキ闘争中

H 春闘が終わり、中小は六〇組合がストライキに入っています。格差と合理化が今のお話のとおり中心的な課題です。中小には大手にたいする不満がかなり顕在化してきております。

京成についていいますと、とくに党員なり活動家に少し弱さがみられますが、私たちを

支持してくれる組合員には「ストもやらすにおかしい」との声が強くなっていますし、意識の弱い組合員のあいだには「マアマア」との状況もあります。

総連、そして京成の見解も「こういうきびしい条件のなかでこれだけとれた」「公労協に道を開いた」のだから「マアマア」だったというもので、生産性基準原理に屈服しているといつてよいと思います。活動家のなかで論議があるのは、「こういうきびしい情勢な中で、組織づくりをしようじゃないか」ということについてです。「たたかいをしながら」組織をつくるというのが本当だろうが、「あまり前に出ないで」という考えもないわけはない。春闘をたたかって、これからの総括のなかで深めなければならぬ点だと考えています。一言でいって、「大衆闘争をもう一度、どうやって構築していくか」だと思っていますが、先ほどの組織づくり、原則についての問題提起を深めていきたいと思っています。

私鉄の労使関係は「満開」

司会 去年、民鉄協の労務担当重役は「九分咲」といったが、今年はどういっているのですか。

H 「満開だ」(笑)といっています。

M 満開に向けてということが強調されています。しかし、総連にたいする突き上げはすごかったですね。私なんか午前二時まで大騒ぎでした。

H 京成の場合、他の大手との格差が二ヶ月あります。そこで代議員の六割強の署名をとり、「格差是正のため独走も辞さずたたかう」という主旨の決議案を提出しました。「独走を辞さず」とはケシカランとの意見もだされ、三時間ちかくの論議になった(笑)。そして決議案どおりになりました。賃上げは昨年までの〇・五ヶ月の格差が〇・一ヶ月短縮〇・四ヶ月格差です。

ITS加盟問題をめぐって

司会 さきほどMさんが、今年の大会で私鉄がITS(国際自由労連の産業別インター)のITF(国際運輸労連)加盟を論議する。全林野の動向はどうかとのことです。

K 去年の提起はこういうことでした。加盟するか加盟しないかはつきりさせず、「討議してくれ」との提起です。この春中央委で中間集約したが、「討議不足」の状況です。そこで再度、討議資料をだすことになっています。

問題は、うちには「分家」がある。これがさきに入るといっていることです。

M 私鉄も同じです。

K しかも、ITSのIFBW(国際建設・林産連盟)から夏以降は待てませんよといってきているらしいんだ。

司会 日林労は一九八〇年の大会でIFBWに加盟を決定。加盟申請中ですね。

K しかも、日林労は同盟として一括ICFTUに参加しています。

F 全郵政については全通がストップしている。逆になっている(笑)。PTTIの書記長が夏くるらしいんだ。どうも全電通の大会とつながっているらしい。このとき、動きがあるかもしれないと考えることはできる。全通にかんしていえば「PTTI」に全郵

政を死んでもいいない」(笑)、という姿勢だ。

M 国労と勤労の共闘は難かしいようですね。うちなんかも二つやらなきやならん。国労、ついで勤労という具合に(笑)。いっぺんにやれば時間も節約できるんですがね(笑)。

D いわれるように現場段階じゃむつかしいですよ。上では四団体となっていますがね。

I 身内の憎しみみたいなものなんでしょうかね(笑)。

M びっくりしちゃいますね(笑)。

D 今年なんかは「生活の知恵」を生かしたとりくみが多くはなっています。

D 話はかわるが全電通の人事が噂されているが、どうなんですか。

G 年度末の手当て問題なんかじゃないでしょうか。この問題では「執行責任をかけて」と大みえを切りましたからね。でもだめだった。「総辞職する」ともいったらしいが、「アマア」となっていた。

K 今年の大会は人事で荒れますよという話もきいています。

相手のやりすぎにつけこめ

I 私は、相手側がものすごくやりすぎたなどおおいに元気を出しているところだ。このままじゃいかんとみんなが知るようになっていくことですね。相手のやりすぎですよ。これまで社青同や協会をやり玉に上げてきたが、それだけではどうにもならんことが明らかにになりましたね。全電通だってそうでしょう。協会、社青同をいじめたからといって物がとれているかといえば、まったく反対です。だから、これまでの運動は「なんだったのか」との声があるともきいていますね。

合理化とのバスターは破綻しました。今までの関係を絶つ。ハトをタカに代えるということですね。いよいよ企業をこえて力を結集し合う、党だって今、報告があったような状況もあるが、党員はまじめです。「イザ」というとき意気消沈ばかりしてないですよ。大衆に依拠していけばなんとかなると考えています。

ただひじょうに重大な時期だから、当面は国鉄の問題を重点的に考えてがんばることが重要だと思う。三池も国鉄と同じです。みんな同じになったということですね。党の問題については、自民党がほんとうに悪いことが明らかになってきているのですから、そのところをしっかりとらえて社会党が対処することが必要ですね。総評が悪いだけではすまない問題です。

下からつくるのが基本です。春闘は終わったわけじゃありません。行革はこれからでしょう、労戦もそうです。国鉄……。しっかりとやろうじゃないか、今年の春闘は納得できんとやるのが重要です。「ヤミ」「カラ」でとられた分も勘定に入れろ、要求は切り下げられている、こんなことで六・九%でなんでもいいのかとね。

向坂逸郎著 好評発売中

嵐をついて

新評論社刊

千二百円

社会党の右傾化をはかる総評執行部

司会 Eさんから総評の社会党への露骨な介入が報告されたが、そのねらいはなんだろうか。

E 社会党を右にもっていくことだと思ふ。

司会 なぜそんなに急ぐのだろうか。

E 労戦と関連していると思う。楨枝、富塚両氏は労戦再編成を進めていますが、その結果、社会党には「左派の選別」の論理とハネ返ってこざるをえないわけです。新生研の馬場書記長が徹底的にイジメられているのが、何よりの証明です。日教組、とりわけ高教組には「労戦再編成反対」の声が強いわけでしょう。九州ブロックにその傾向が強いと聞いていますし、馬場さんは熊本高教組の出身です。

司会 しかも中立労連が同盟寄りの立場を鮮明にし、社会党に干渉を強めている状況もあるようですね。

E 「選別」をやろうとしているフシがあります。国会議員一人ひとり「左派の立場をとるようなら推せんしない」ともいつていると聞いています。

司会 「選別」の先陣を切ったのが、この前の選挙で全電通でしたが、全電通の社会党への介入は目に余るものがある。最近はどういう状況ですか。

目にあまる全電通の社会党介入

G めちゃくちゃに介入している。ちょうど資料をもってきておりますから、若干紹介させてもらおうと、こういう状況です。

第一に馬場書記長を名ざしで誹謗・中傷していることです。公党の書記長を正式の機関紙ですよ。党大会直後の『全電通新聞』（八二・二一・二三）ではこういつています。

▽：今回の社会党大会に出席した全電通の代議員は、みなカンカンになって怒っている。

人事問題の不始末はもちろん、それ以前の問題として、大会代議員の全電通に対する敵対的言動は許せないという。

本会議、小委員会で全電通代表が発言しても、聞くに堪えないヤジと怒号でどうにもならないフンイキだったという。この状態は、かつての組合大会における社共対立よりもひどいというのだからお話にならない。

▽：また大会論議のいくつかの局面で、赤ジャンパーを着た若者や、ヒッピーまがいの青年が、『総評の右翼的労働戦線統一粉砕』を叫び、総評労働運動糾弾の大合唱をくり返したという。

もちろん大会代議員のすべてがそうであつたわけではない。こういうフンイキの中でも全体の四割強を占める党改革派代議員は真面目に頑張つた。しかし程度の低い手合いのゆさぶりでこれがかき消されるような現状では、誰も社会党の明日に期待を寄せる気にならない。

▽：全電通の代議員は、『これが、われわれが物心両面にわたり運命共同体的に支持しつ

づけてきた社会党か』『これが仲間うちの議論か』『こんな仕打ちを受けてなおかつ社会党の支持団体で一方的ラブコールをしつづけねばならないのか』と、深刻な自己矛盾を感じたという。四六〇万労働者が総意を結集し、大会決定でとりくんできた総評の労働戦線統一方針を中傷・誹謗するに至っては、正に何をかいわんやの心境だと怒っている。

▽：人事問題にいたっては、もはや論評の価値もない。かねてよりリーダーシップ不足、不決断、社会主義協会偏重と批判されてきた飛鳥田さんだったが、こんなにひどいとは思わなかった。能力と人柄の点で、不適格との評価をうけ日教組の副委員長をやめた人を、派閥の論理と、委員長選挙の論功行賞で無理矢理書記長に押し込み、挙党体制をブチこわしてしまったその責任はきわめて重い。

原則論者の片肺執行部では、何ものも期待できまい。

▽：支持団体として全電通が一年間に社会党へ納めている金は四千万円強。これは、埼玉県本部と同レベルだ。しかも選挙のたびにわれわれがこれに加えて負担しているカンパ資金と、手弁当主義による動員力負担を考えると、われわれの社会党への貢献度は大変なものだ。にもかかわらず、これを敵視したり馬鹿にしたり、挙党体制確立への期待をも一蹴するような社会党なら、われわれも今後の在り方を根本的に考え直さざるをえなくなる。そんな問題点を露呈した第四六回社会党大会ではあった。」(『全電通新聞』八二・二一・一三)

I めちゃだなあ。

G 本当にめちゃくちゃです。組合員が抗議の声を上げれば、「即処分」、「介入した」とドラ声を上上げるのですが、自分の方は平気で「介入」しています。この介入もひじょうに政治的なんです。三月の中央委員会には馬場書記長が来ひんとしてあいさつしましたが、新聞には発言要旨も紹介されていないんです。「日本社会党書記長 馬場昇」とだけありました。この三月六日付の『全電通新聞』のコラムでは「今回の中央委でまずかったのは、社会党の馬場書記長の来ひんあいさつで、会場がヤジと怒号のつぼと化したこと。こんなことは全電通労働運動史上初めてのことだ。馬場さんにもう少し、物のいい方を勉強しなおしてほしいと言いたい」と説教までしています。

ここまでやられれば私だって馬場さんがどんな発言をしたのかわかりたくありませんよ。こういう感じをもった組合員は多かったですと見え、組合員から「なぜ載せなかった? 社会党馬場書記長の来賓あいさつ要旨」が寄せられたからでしょう。それに情宣部長名でこう答えているんです。

基本は路線問題

「社会党の馬場書記長のあいさつ内容を載せなかったのは、激しいヤジのため内容が正確に聞きとれなかった(記者席では)」ということもありますが、全電通としてとくに問題と
思ったのは、やはりその内容です。

同書記長は第二臨調でいま論議されている行政改革などに対して『かつての三池闘争のように闘おう』と言われました。そのときには最も激しいヤジが集中したことは八六中委のすべての参加者がご存知のとおりです。

私たちとしては、ここで三池闘争の評価を改めてしようとは思いませんが、問題は『三

池方式』の闘い方ではとても国民的な理解も得られないし、また相手側に対して有効な闘いになり得ないということです。十分ご承知かと思いますが、とくに行政改革（電電公社制度の改革もその焦点）のような課題に対しては、組合側として、きわめて具体的な政策を対置し、その実現をはかるといふ発想と行動が不可欠であります。

この立場からすると、失礼ではありましようが、先のあいさつ内容は、あまりにも時代感覚として、私たちと合わないと考えざるを得ませんでした。

焦点をボカして無難な内容にすることも組合機関紙の内容としてはとれないところであります、また問題のところをそのまま載せることも適切ではないと考えました。

なお社会党との支持協力関係は今後とも維持し、充実ははかっています。そのためにも自主的な労働組合として、社会党ならばなんでもいいということは絶対に避けなければならぬと考えますし、良し悪しの区別はより厳しくして行くこととしています。ぜひご理解をいただきたいと思えます。」

じつにはつきりしているんですね。馬場さんのもっている考え方が気に入らんからだというものです。じつに政治的ですよ。ですから、全電通などの一部右派組合が裏でどんなにえげつない干渉、介入をしているかは想像できるどころです。

I 許せないねエ

司会 しかし、意外とその事実が知られてませんね。やっぱりもつと知らせていかなければ。

F それにしても政治的だな。

司会 私、同盟の大会を傍聴しましたが、社会党左派への憎悪はものすごいですね。「左派がいる以上、いっしょにやれない」「左派を小さくするために右派の議員をおすことも考えたい」と、平気で社会党への介入が口にされていました。しかし、全電通のやり方は同盟よりももつとひどい。

組合強化が社会党の前進につながる

E 社会党問題は今や党内だけの問題じゃないんです。一部の労働組合が右派を強力にバックアップする、それに公明、民社・同盟もからんでくるでしょう。総評の介入にもつとも大きな原因がある。ですから、社会党は社会党でがんばらなければならぬが、労働組合の階級的強化が今ほど重要なときはないと思えます。

D 社会党は労働者の気分を反映しますからね。

E そうです。

I いよいよ組合、春闘の再構築が重要ですね。Kさんがいわれたように、これへの一歩は職場からの大衆闘争の構築だと思う。これにむけて全力をつくしあいたいですね。ぜひこの点に力をおいて総括運動をやっていたいただきたいですね。（おわり）

六月上旬刊 B 6版・二〇〇頁 国鉄「再建」をめぐる基本問題

行政改革と国鉄労働運動

小林晃 編著

行革、国鉄攻撃、労戦の右翼的再編成、防衛力増強に象徴される政治反動は不可分一体です。行革は「増税なき財政再建」をスローガンに国民的思想「改造」運動（土光老人の『経営者』・日経連機関紙での発言）として進められています。生活はこの破綻を証明しました。とたんに一転して第二臨調は公企体に攻撃を集中してきました。とりわけ、国鉄にたいする攻撃です。このねらいは今や明白です。

独占・政府自民党は(1)高度経済成長の破綻にともなう国内の階級矛盾の激化、(2)国内の階級矛盾をさらに増幅せずにはおかない国際情勢(①アメリカの圧倒的軍事力優位の崩壊②資本主義諸国の不均等発展と大恐慌の再来とすらいわれる不況の深化、③体制間矛盾の激化と社会主義体制の前進)に大きな危機感をいだきはじめています。したがって、彼らのねらいは「どういう事態にでも対処できる国内体制の創出」にあることは明らかです。この障害物が総評労働運動、とりわけ機関車の役割りを果たす国労です。しかも国労は社会党を支えるもつとも強力な組織です。その国労が弱体化したらどうなるか。考えるだにぞろしいことです。したがって、国鉄をめぐる問題はたんに国鉄労働者にかぎらず、全労働者、日本労働運動のゆくえと大きなかわりをもっています。社会通信社で本書を企画したのもそのゆえです。ぜひ参照していただければ幸いです。

なお内容は次のとおりです。

序章 国鉄攻撃の意味するもの（対談 向坂逸郎／岩井章）

第一章 行政改革と労働者階級

一、はじめに 二、財政「危機」はなぜ生じたか 三、第一次答申の持徴 四、第一次答申と八二年度予算 五、第一次答申の「理念」 六、基本答申とその「理念」 七、行政の役割りと「小さな政府」 八、福祉行政は「人心の荒廃」を招く!? 九、新自由主義思想と「行革」 十、徹底的な本質の暴露を

第二章 いまなぜ国労攻撃か

第一節 現場協議制の意義と課題
第二節 反マル生闘争のたたかいと教訓
第三節 いまなぜ国労攻撃か

第三章 国鉄「再建」をめぐる基本問題

第一節 国鉄とは何か―その本質と役割り
第二節 赤字・危機の要因と本質
第三節 国鉄労働者の搾取、そして赤字
第四節 国鉄「再建」の階級の本質

第五節 赤字・行革攻撃下のたたかいをめぐる諸問題

第四章 「ヤミ」「カラ」攻撃―反撃への基本視点

一、「ヤミ」や「カラ」にも理由がある 二、労働組合とは何なのか 三、許せない労働組合無視ノ 四、当局・敵への怒りを組織する 五、敵の脆弱点に切り込めノ 六、統一闘争をめざして 七、交流―何を学びあうか 八、あらゆる職場にたたかひの火を 九、たたかう組織づくりを 十、学習、党、社青同の強化

第五章 学習とたたかひが組織をつくる（国労甲府支部のたたかひと教訓）

一、職場のたたかひは十分か？ 二、学習が力の源泉 三、職場の緊張が規律をつくる 四、今は戦線拡大のとき 五、改良闘争に工夫を 六、大衆闘争は知恵を生む 七、反独占統一闘争へ